

善照寺  
寺報

# ぜんしょうじ

第6号

〒272-0131

市川市湊十八番二十号 善照寺  
電話 四七(三五七)二二三三二  
FAX 〇四七(三九七)一三三二

## 年々歳々花相似たり

### 歳々年々人同じからず

善照寺住職 今岡達雄

中国、唐時代の詩人に劉廷芝という人がおりました。その劉廷芝の『白頭を悲しむ翁に代わつて』と題する詩の一節に表記した詩文があります。

「毎年春は巡り来て同じように花が咲く、しかしその花を眺める人は同じ人ではない」

春になり梅が咲き、お彼岸がやってくる頃になると何時もこの詩文を思い出します。長年、学校の先生をしていた父の口からこの詩文を何度も聞いたような気がします。学校の先生をし

ていると、とりわけ感慨が有るようで、三月の卒業、四月の入学のシーズンには必ず桜が咲き、先生は替わらないのに、その場にいる生徒や学生は何時も変わってしまうからでしょう。

父から住職を引き継いで足かけ二十四年になります。寺務所から見る鐘楼は昔と全然変わりません。庭の真ん中に松の木があり、本堂も昔のままです。しかし、去年までお参りに来られたおじいちゃんやおばあちゃんの内何人かは、今年はお参り

される側になつて居るのです。まさに、この世の中とはこんなものなのだと考えさせられるのもこの時期です。

まことに残念なことに命あるものは全て限りがあります。若くして亡くなる方もありますし、長寿の方もいらっしゃいます。すが、何時しか阿弥陀様の極楽浄土に往生するのが定めです。そして別れはまことに悲しくて辛いものです。

それでは残された私たちに出来ることは何でしょうか。ただ嘆き悲しむだけでは済みません。私たちに与えられた生活を力強く生き抜き、先にお浄土に旅立たれた方々を思い続けること、これが「供養」ということです。「私はあなたのこと決して忘れません。何時までもあなたのことを思い続けています。」このような気持ちを持ち続けることが、亡き人を供養するということなのです。楽しいことも、苦しいことでも亡き人に報

告し、何時も共に有ることを感じて下さい。この供養の気持ちを示すことによつて、今生きている私たちは亡き人々から護られて毎日を過ごすことが出来るのです。

春はなぜか心ウキウキする季節であります。しかしまた同時に自然の力を感じさせられる時期です。だからこそ、この時期に「お彼岸」の習慣が出来たのではないのでしょうか。

是非とも先亡諸霊のご供養にいらつしゃつて下さい。合掌



京都知恩院の隣に円山公園という公園があります。祇園桜という名のしだれ桜がとても見事です。

## 住職法話

## お彼岸つてなーに

お釈迦様の言葉（梵語、昔のインド語）を漢字に当てはめる時に、そのまま音写する方法と意味する内容に翻訳する方法の二つの方法がとられました。例えばアミータは音写すると「阿弥陀」、意味する内容で翻訳すると「無量寿」になります。

パラミターという言葉があります。音写すると「波羅蜜多」ですが、言葉の持つ内容は「迷いの此の岸を離れて悟りの彼岸に到達すること」「つまり「到彼岸」になります。昔から「暑さ寒さも彼岸まで」と申しますが、四季折々の変化のある日本の気候の中で、彼岸という言葉は仏教語というよりは、特別な日常語になっているようです。迷いの此の岸を離れて悟りの彼岸に到達すること、つま

り仏道の修行を行って悟りの境地に達することがなぜ年二回の春分・秋分の仏事の習慣になったのでしょうか。今回はその謎について考えてみましょう。

中国に善導大師というお坊さんがおりました。観経疏（かんぎょうしよ、観無量寿経の解説書）と二河白道（にがびやくどう）のたとえをお説きになったので有名です。法然上人もこの観経疏を読んでお念仏を最も大切なものと考えようになりました。この二河白道と観経疏が現在のお彼岸の習慣に大きく関連しているのです。

二河白道とは、こちらの岸はこの世（此岸）、向こう岸は極楽浄土（彼岸）、その間には燃えさかる火の川と荒れ狂う水の川、そしてその間に一本の白い道があります。盗賊と猛獣に追われた旅人が一人、白い細道を渡ろうか渡るまいか考えあぐねています。渡るには余りにも細すぎる。落ちたら水におぼれる

か、火に焼かれるか。その時向こうの岸から早く来いと呼ぶ者がおり、こちらの岸では早く行けと勧める者がいる。これが二河白道のお話です。向こう岸（彼岸）にいるのは阿弥陀様、こちらの岸で背中を押すのはお釈迦様、白い道はお念仏、善導大師はこのようなたとえ話でお念仏を勧め、極楽浄土（彼岸）へ渡ることを勧めました。

観無量寿経というお経は阿弥陀様の極楽浄土を想像させるためのお話です。極楽浄土を思い浮かべるために十六ステップの方法が示されています。その一番目が「日想観」です。観無量寿経にはこのように書かれています。「正しく座り、西を向き、沈み行く太陽を観なさい。太陽が沈もうとするとき、その大きな真ん丸の太陽を心に刻みなさい。そして、目を閉じても太陽が思い浮かべるようにしなさい。これが日想観であり、第一の観想です。」

極楽浄土（彼岸）を思い浮かべる第一の方法が沈み行く太陽を心に刻む日想観であり、真西に太陽が沈む春分・秋分の日が極楽への願望を実現するために最もふさわしい時期に当たるのです。この日の夕日を拝めば、西方十萬億土の彼方にある極楽の世界を、眼前に拝むことができる。こんなことが日本の国に彼岸の行事を定着させたのではないのでしょうか。

彼岸の七日間は迷いに溺れている現実の状態を反省し、理想世界であるところの悟りの彼岸、お浄土の世界に往き生まれることに思いをいたし、努力精進する週間です。同時にこの世に生を受け、生活できることに感謝し、私を生み育ててくれた親や、先立たれた先亡の霊の冥福を祈るといことが大切で、そうすることが、他の何物によっても得られない、仏様のご加護をいただくことにもなるのです。

（住職）



## 世界一美しいお花

私は誓う

如来の力をいただいて

一切の恐れおののく人に

大いなる安らぎを与えよう

…果てしない苦の中に

この身をとどめることに

たとえなつたとしても

忍んでけつして悔いない」

(阿弥陀仏のお誓い)



おひがんのシーズンになると、善照寺のお墓も色とりどりのお花でかざられます。おひがんは、お墓まじりのシーズンです。

お墓のあいだを歩くと、お花をおそなえなさつた皆さんの気持ち、私の方にも不思議と伝わってきます。まごころのこもつたお花がならんで、ほんとうに極楽のような風景です。

そんなことが伝わるのも、お花がこちら向きに生けてあるか

らでしようか。

そういえば、仏前におそなえ

するお花も、仏様におそなえ

るはずのものなのに、仏様から

は見えないようになっていま

す。お墓にも、石の方に向けて

お花をおそなえする方はおられ

ません。

とあるお墓がありました。

いつもみずみずしい

お花がいつぱいの、美しい

お墓です。そのお墓に

お参りしている方の気持ち

ちは、大きすぎてよくわ

からないのですが、何か

がひしひしと伝わってきます。

そんなときに私はいつも、と

ても気にかかります。仏教の教

えがみなさんに少しでも届いて

いるかどうか。

この世を去っていった人々

は、いったいどこでどうしてい

るのでしようか。きらびやかな

仏の国で楽しく過ごしているの  
でしようか。

そう思つて多少いやされるこ

とはあつても、そんなところに

いないで帰つてきてほしい。そ

の気持ちは我慢できません。故

人はあの世で幸せにくらしてい

る。そう思いこむのもいい。そ

れもいいけれど、まだ何かが足

りない。それが本当の極楽では

ない。私はそう思います。



お花でいつぱいのお墓と向か

い合つてみます。そこには、亡

くなつていった方への思いがこ

められていて、こめられていて

けれど、その思いはどうして、

お花を亡き人にささげるだけの

思いではない。もしそうなら

ば、お花は墓石の方を向いてい

るはずですよ。

冒頭には、お経のなかから引

用して、阿弥陀様の誓いのおこ

とばをかかけました。こんなに

すばらしい誓いがこの世にある

。言いしれぬ興奮と感動をおほ  
えます。

それを私に感じさせるものこ

そ、阿弥陀様の正体ではないか

と思つています。

美しいお墓を見ているとき

も、なぜか同じものを感じるの

です。不安におののくすべての

人々、私にも、この亡き人に

も、大いなる安らぎを与えると

誓つてくださった阿弥陀様。こ

の美しい花々は、その安らぎの

中からやつてきたのではないか

と思わされます。そしてそれを

見る私にも、それを分けてくれ

る。

まさに極楽のような、おひが

んのお墓です。

(副住職 達彦)

お寺との付き合い

お彼岸のお参り

春のお彼岸は中日(春分の日)を挟んで前三日、後ろ三日の七日の期間です。初日を彼岸の入り、最終日を彼岸の明けといいます。今年はそのようになりません。

彼岸の入り 三月十八日(火) 中日 三月廿一日(金)

彼岸の明け 三月廿四日(月) 彼岸入りの日には、家庭の仏壇をきれいに整え、新しい花を付けて彼岸だんごやぼたもちを供えます。お彼岸は本来、自分自身が向こうの岸に行くための修行期間ですが、既に極楽浄土(彼岸)にいらつしやる方々の供養を行うことも重要な事なのです。

昔はお盆と同様に、お彼岸にも住職が各家を訪問して仏壇でご供養を行ったそうです。善照寺では前住職の時代からの習慣で、仏壇ではなく寺で供養を行っていました。ですから、お寺に供養をお願いし、墓参りをしてから、本堂の

本尊の前で手を合わせ、先亡・先祖代々霊位のご供養と自分自身の極楽往生をお願いするのです。

丁寧な供養をなさる方はこの期間毎日墓参されます。入り・中日・明けの三回墓参される方も多くいらつしやいます。寺の近くの方は、ご兄弟やお子様、親戚の方々が訪ねてきたとき一緒に墓参にいらつしやいますので、お彼岸中に何度も顔を会わせることになりません。寺から離れた檀信徒の皆様も一度は墓参に來られますようお勧めいたします。

また、日頃気になつていても供養が出来ない霊位のご供養を彼岸に併せてなさる方もおられます。その場合には塔婆をあげ供養します。寺に來られたときにお願いただければ、後日供養を行い、塔婆をお墓に立てておきます。

お彼岸のお布施

さて、寺に墓参に行くとき寺には何を持って行きましようか。皆様お悩みのことと思います。

- ・お布施(あるいは志)
- ・お菓子

まずは、先亡霊位の供養のためのお布施です。三丁五千円が中心で千円のことも一万円のものもあります。皆様のふところ具合に合わせてお考え下さい。次にお菓子です。これは仏様へのお供物ですから、自宅の仏壇へそなえると同時に寺の本尊へのお供物です。昔はお手製のおはぎ、ぼたもち、草もちをいただきました。毎日毎日ぼたもちばかりの日が続きました。仏様へのお供物ですから私共にも文句は言えませんが、仏様もゲップも知れませぬ。最近はお菓子代を含めてお布施とされていくようです。(住職)



編集後記

「人と生まれるのはむずかしくやがて死ぬべきものが/今いる正しい教えを聞くことはむずかしく/諸仏が世にできることもありがたいことだ」 『法句経』より 人間として生まれたことは、貴重でめつたにないということ。その出生と生存の尊さ不思議さに目覚めたとき、そこにありがたさを実感するということ。すべてのものの恩恵をうけている。そのとき、仏の慈悲がこの私にふりそいでいると感ぜられるということ。

私事で恐縮ですが、この春で長女が初めての誕生日を迎えました。娘の誕生と重ねて、改めて人間の生命の尊さに触れたこと。また、未熟な私も親になつて満一歳。喜びをかみしめながら、多くの方々に支えられているありがたさを実感しました。

合掌(副住職室 久美英)